

2023年度(令和5年度) 学校評価自己評価表

城西中学校区	校番 58	福山市立山手小学校
最終更新日		2024年(令和6年)2月15日

I 福山市

ミッション ビジョン	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している
---------------	---

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型スキル&倫理観)	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
○学習に対する取組は、各校とも一定の成果が出ており、小中ともに児童生徒が意欲的に学びに取り組んでいる様子が分かる ○コロナ禍でできなかった様々な活動や行事ができるようになり、子どもたちが生き生きと楽しく学校生活を送っていると感じられる ●デジタル機器の活用は必要だが、それにより家族等との会話が少なくなることが心配だ ●読書活動など、各校のよいところをお互いに取り入れていくことが大切である	○「子ども主体の学び」の実現に向け、校区で研究・実践を継続し、授業改善が進んでいる ○行事等を通して小中の連携が図られ、意欲的に頑張る児童生徒の姿が多く見られる ○コロナの状況も落ち着き、学校行事を中心にあらゆる活動に主体的に取り組み、自分たちが学びを創り上げるという意識が高まった ●コロナ禍の影響もあり、長期欠席者が多い状況がある。引き続き、小中が緊密に連携し、丁寧な取組を行っていく必要がある	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	地域に愛着と誇りをもち、心豊かにたくましく生きる子ども
		中学校区として統一した取組等	○自己肯定感を高める（小中合同ボランティア活動・中学校オープンスクール） ○コミュニケーション力・表現力・忍耐力をつける（校区公開授業研究） ○健康への意識を高め、体力向上を図る （体力向上の取組・体力テストの分析・生活改善の取組・校区保健だよりの発行）

III 自 校

ミッション						育成する力 (21世紀型スキル&倫理観)		コミュニケーション力 ・ 表現力 ・ 忍耐力			
『元気』と『笑顔』あふれる やまて						めざす 子ども像		全 学 年		○児童が、自分自身を理解するとともに、お互いを認め合い、高め合っている ○児童が、自ら疑問や課題を見つけ、解決に向け自分や仲間と意欲的に調べたり考えたりして、学び続けている ○児童が、自分たちの生活をよりよくしていくために、積極的に考え、取組を企画し、仲間と協力しながら、粘り強く取り組んでいる ○児童が、地域の行事やボランティア活動に積極的に参加し、地域の人たちと協力して、地域を笑顔にしている	
学校教育目標 自ら学び 心豊かに たくましく生きる児童の育成											
現 状						研究		テーマ		子どもたちが「夢中になる授業」をめざした、 子どもたちの「学び」と先生たちの「学び」をつなぐ授業づくり	
児童が主体的に進め、「学び」を広めたり、深めたりしていくために、児童が「夢中になる授業」づくりに取り組んできた。その取組を振り返り、改善していくための指標とするために、「学び」に関するアンケートを全児童対象に実施した 〈肯定的評価〉										■「学び」のつながりはあったか 〈子どもたちの「学び」〉 ○主体的に学ぼうとする姿があり、学習内容(単元・「本時」)のねらいにせまり、「学び」の面白さを味わうことができたか 〈先生たちの「学び」〉 ○そのための「教材研究」はできていたか	
＜授業づくり＞ 「めざす授業の姿」に至っているとは言い難い。また、ICTの効果的な活用についても課題が多い。引き続き、児童が「夢中になる授業」をめざして、個々の職員が教材研究を進め、組織的な授業づくり研修によって、先生たちの「学び」を充実させていく						めざす授業の姿				・ 学習活動が主体的・自律的である ・ 明確な課題意識をともなった活動である ・ 目標達成、及び、課題解決への営みが持続されている活動である ・ 目標達成、及び、課題解決に役立つ情報に敏感になっている ・ 目標達成、及び、課題解決に見通しを持って取り組み、期待が持てる活動である ・ 活動の経過とともに、はっきりと成果物などの変化がある	

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立山手小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	加 点 評価	達 成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	加 点 評価	達 成 評価	総合 評価	改善方策
4	主体的・ 対話的で 深い学び による学 習意欲と 学力の向 上	★	継 続	自身の「伸 び」を実感 できる児 童の育成	◇導入の工夫と振り返りの充実を行う ◇読書意欲を高める活動の工夫を行う ◇教育相談を充実させ、少人数指導やスモールステップによるドリル学習を設定して、学習意欲を高める	■自己肯定感に係る質問に肯定的な回答をした児童の割合を前年度以上にする ■学力を伸ばした児童の割合を前年度以上にする ■学力調査正答率40%未満の児童の割合を前年度以下にする	・学習の振り返りの充実を図るため、振り返りの指標を再検討した。「授業で考えることが面白い」と回答をした児童が91%で、前年度より3.5%伸びている。 ・学校図書館の改装を行い、2学期から利用が再開された。利用者を増やすために、図書委員会を中心に、読書推進活動を実施している。 ・学力の伸びを把握する調査(4～6年)の結果、昨年度より学力を伸ばした児童が国語 72.4%、算数 73.7%であった。前年度 5・6年と比較すると、国語は 6.4%下がり、算数は 4%伸びた。 ・学力の伸びを把握する調査において、正答率 40%未満の児童の割合が国語 24.3%、算数 27.7%であった。前年度と比べて国語は 3.1%増加し、算数は 3.5%減少した。 ・学期末に少人数指導や習熟度別学習を実施している。	3	3	◇導入の工夫と振り返りの充実に向けて、職員研修を行う。 ◇学校図書館運営委員会を発足し、望ましい学校図書館の在り方について協議を進め、活動を充実させる。 ◇結果を研修等で分析し、今後の改善案を学校としてまとめ、実践する。児童や保護者へも結果や取組について伝える。 ◇伸び率や 40%未満の児童の割合は学年による差が大きい。それぞれの学年の正答率の課題や 40%未満の児童の課題を学年団ごとに分析し、学習相談を進め、個に応じた少人数指導を実施する。	・振り返りの充実に向けて職員全体で研修を行った。また、次年度に向けて振り返りの指標について話し合い、作成した。「授業で考えることが面白い」と回答をした児童が 87.8%で、前年度よりも 0.3%伸びている。 ・学校図書館の利用推進に関わり、図書委員会がおすすめの本の展示やポスターを作成した。昨年と比べ、利用者数は 2.7 倍、貸出数は 2 倍に増えた。 ・学力調査の結果について、別途学力状況の詳細を示した資料を作成し、児童本人に説明・配布を行った。学校の成績と同時に配布したことで、学力の定着率を総合的に判断することができた。 ・学期末を利用して少人数指導や習熟度別指導を実施した。	4	3	3	・児童の頑張りと活動、伸びに対して教師からの「認める姿勢を言語化」「賞賛」「肯定的評価」「価値づけ」を積極的に行う。振り返りの際は、具体的な例を提案しながら振り返るようにする。 ・学校図書館運営委員会の担当や補助員との連携を密にし、授業での学校図書館利用の機会を増やす。 ・カリキュラムを柔軟な視点で計画的に進めることで、学年末に限らず少人数指導の実施を複数回行う。
2	自己指導 能力の育 成		継 続	よりよい 学校生活 にしてい こうとす る児 童 の 育 成	◇児童会を中心としたキャンペーン等を行い、児童全員が楽しめる取組を行う ◇相互評価、他者評価場面を日常的に仕組み、よいところや個性を理解して、互いを認め合える集団づくりを進める	■「学校が楽しい」という児童の割合を前年度以上にする ■児童会目標を達成しようとしている児童の割合を95%以上にする ■「自分にはよいところがある」「友達や家族や先生に『ありがとう』と言われたことがある」について、肯定的回答をする児童の割合を前年度以上にする	・児童会のキャンペーンを行った結果「学校が楽しい」と感じる児童は全校で93%であった。高学年児童の学力調査質問紙による昨年度との比較では、6.9%肯定的評価が高まっていた。 ・帰りの会で児童会目標の振り返りを行った。児童会目標を達成しようとしている児童は90%で目標に達していない。 ・児童会目標として取り組んだり、各学級での振り返りを行ったりした。「自分にはよいところがある」の肯定的回答は87%で前年度より3.5%、「友達や家族や先生に『ありがとう』と言われたことがある」は、95%で、前年度より2%、ともに下がっている。	3	3	◇引き続き、児童全員が楽しめる取組を実施していくとともに、アンケートの回答やアセスの結果から個々の児童への具体的な指導・支援を進める。 ◇達成状況について、確かめ合えるような児童会目標にする。 ◇個々の児童のよかったところや成長を教員がしっかりと見取り、その都度児童に伝える。 ◇運動会、音楽発表会といった行事などにおいて、目標をもたせ、お互いに助け合ったり高め合ったりしたことなどを具体的に振り返らせる。	・アセスの結果を指導支援に生かすため、結果分析の研修やアセスメント会議を行った。「学校が楽しい」と感じる児童は全校で 94%となり2学期よりも肯定的評価が高まった。 ・毎日の振り返りを継続して行い、振り返りやすい目標設定をした結果、児童会目標を達成しようとしている児童は、95%となり目標を達成した。 ・教員からの肯定的評価や各学級での相互評価の取組の結果、「自分にはよいところがある」の肯定的回答は 92%で前年度より 1.5%伸び、「友達や家族や先生に『ありがとう』と言われたことがある」は、97%で前年と同じ割合であったが、1 学期より2パーセント伸びた。	4	4	4	・引き続き、アセスの結果をもとに児童個々への支援策を考え、取り組む。 ・児童の相互評価の機会を増やしたり、教員からの肯定的評価をさらに増やしたりしていく。 ・児童会を中心に自己を振り返り、さらに良い所を伸ばしていくことができる取組を行う。

			自己の健康と体力を高めるために	◇自己目標を設定する ◇「ロング昼休けい」を設定するなど、遊びや運動の楽しさを実感できる取組を工夫する	■新体力テスト「ソフトボール投げ」において自己目標達成者を85%以上にする ■外遊びをして、「楽しい」と感じる児童を85%以上にする	・新体力テスト「ソフトボール投げ」における自己目標達成者38%で、目標を達成できていない。「自己目標に向けて努力できた」と感じている児童は、94%であった。 ・学年ごとにロング昼休憩を設定したり、体育委員会のキャンペーンを実施したりした。外遊びを楽しんでいる児童は85%で、目標値を達成できている。	3	3	◇新体力テストの自己分析の機会を設け、再計測に向けて自己目標を再設定させる。 ◇児童に自己分析させる際のポイントを教職員間で共有する。 ◇体育委員会の「ボール投げキャンペーン」など、児童発案による取組を続ける。 ◇体育委員会を中心に「外遊びデー」を設定し、外遊びをする機会を創出し、みんなで遊べる「遊び」を推奨する。	・自己分析させる際のポイントを教職員間で共有したが、クラスごとに認識の違いが生じた。自己目標達成者は、48%であった。 ・体育委員会が「外で遊ぶキャンペーン」を行い、外遊びをする機会を設けた。また、各々がどのように楽しんだかを振り返り、体育委員会が発信することで楽しさの「質」を追求させた。外遊びをして「楽しい」と答える児童は、85%で目標を達成した。	3	3	3	・運動を行う際の児童への具体的な声かけの仕方を情報共有する。 ・体力向上計画の目標や取組内容を職員全体で共有し、児童の運動への意欲向上につなげる。
1	授業力の向上	新規	学びづくりへ向かう時間の確保と互いのよさを生かした授業力の向上	◇学年会の中で、児童の「学びの姿」をもとに授業づくりについて話し合い、協働して教材研究を進める ◇各部の取組や学年の様子について月1回以上交流する機会を設ける	■自身の授業や参観した授業について、児童の具体的な「学びの姿」を挙げて日常的に対話する ■「授業づくりを行う時間が確保されている」「個性が認められている」と感じる教職員の割合を前年度以上にする	・研究授業では、児童の学びの姿とその他の教員の教材研究について交流している。教職員アンケートでは、「日々の授業や子どもの姿について対話している」の肯定的な回答の割合は94.1%であった。 ・各部の取組や学年の取組を月1回交流している。教職員アンケートの結果、「授業づくりに当てる時間がある」の肯定的な回答は100%で目標を達成している。児童が学習方略の変容を感じつつあることから教職員の創意工夫が生かされてきていると言える。一方で、「個性が認められていると感じる」の肯定的な回答は82.4%で、前年度2回目の割合には達していない。	3	3	◇引き続き、めざす子どもたちの姿やそのための教材研究について学年や学校全体で日常的に話をしながら進める。 ◇学年の様子や取組、工夫について定期的に交流する機会を続け、個々の取組を全体へ広げ、自身の授業などで取り入れられることを考える。	・授業づくりの研修を行い、つけたい力や落としてはいけないことは何かなど、視点を明確にして各学年で教材研究を行い、実践した。「日々の授業や子どもの姿について対話している」の肯定的な回答は、100%であった。 ・各部の取組や学年の取組について交流する時間を月一回行った。2学期教職員アンケートの結果、「授業づくりにあてる時間がある」の肯定的な回答は、95%、「個性が認められていると感じる」の肯定的な評価は、100%となり、ともに前年度を上回り、目標を達成した。	4	4	4	・視点を明確にして教材研究の時間を設けることで、教員全体で統一した研究ができるようにする。 ・学年の取組を伝え合う機会を継続し、学年以外の教職員とも日常的に対話することができるようになる。

[プロセス評価の評価基準]

評価点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評価点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評価点	評価基準
5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。